ISSN 2186 − 3989

王充における人生と書

笠原　祥士郎

The Life and Literature of Wang Chong

Shojiro Kasahara

北　陸　大　学　紀　要
第47号(2019年９月)抜刷

北陸大学紀要
第 47 号（2019）
pp.107～123
〔原著論文〕

王充における人生と書

笠原　祥士郎*

The Life and Literature of Wang Chong

Shojiro Kasahara*

Received April 26, 2019
Accepted May 17, 2019

Abstract

Wang Chong（王充）'s fatalism assumes a purposeful nature while denying the heavenly existence of transcendentalism and mysteriousness. Alternatively, as a result of the workings of nature having been overly emphasized, Wang flatly rejects the efforts made by man and a lot of scholars have negatively perceived his works which has resulted in his position having being retreated from the history of thought. One aspect to Wang's fatalism does certainly negate man's independence and individuality although this thesis instead proposes that Wang's fatalism strongly recognised man's individuality. Namely, that Wang's worldview was dominated by chance and that his idea of fatalism is tinged with a two-sided nature of inevitability and coincidence. Further, in respect to inevitability, strong hints of coincidence exist. Mankind is placed in a world of contingency beyond that of disinterested idleness and I would like to point out that Wang strongly emphasized man's need to achieve his moral objectives.

問題の所在

中国思想史上、空前絶後の批判思想家とされる王充は、字を仲任と言い、會稽上虞（今の浙江省紹興市上虞区）に生まれた。『論衡』[1]自紀篇によれば、彼は後漢光武帝の建武三年（西暦 27 年）に生まれ、『後漢書』の王充王符仲長統列伝に「永元中，病みて家に卒す」とあるのによれば、後漢永元年間（西暦 89 年 － 105 年）に亡くなったとされる。確かな享年は分からない。すなわち、後漢時代の光武帝、明帝、和帝、章帝の四人の皇帝の時代を生きたことになる。彼が著した著書には『譏俗節義』『政務』『論衡』に『養性書』の四書がある。『後漢書』および『抱朴子』の記載によれば、蔡邕は『論衡』を手に入れると、それを秘玩とし議論をするための智慧の補助とした、という。また、その後、王朗が『論衡』を手に入れると有益なものと見なし、果たして

*国際交流センター　International Exchange Center

『論衡』は「異書」として世に伝えられ現存することとなった。因みに、その他の著書はすでに散佚してしまい、今はそれらの書を読むことはできない[2]。

さて、王充の人生について、周桂钿氏は「王充是中国东汉时代颇有特色的哲学家。国内外许多学者对他的批判哲学都很熟悉,而对他的生平却不甚清楚。尽管范晔《后汉书》为王充立了传,《论衡》又有自传性的《自纪篇》,但他的事迹乃有许多不明确之处。甚至有学者认为本传是不可靠的,使本来就不太明朗的情况更加模糊了。因此,有必要再做一番考证和辨析（王充は中国後漢時代のすこぶる特色ある哲学者である。（中国）国内外の多くの研究者たちは彼の批判哲学についてよく知っているが、彼の生涯についてははなはだしく不明瞭である。范曄の『後漢書』は王充のために伝を立て、『論衡』にも自叙伝のような「自紀篇」があるにもかかわらず、彼の事績にはなお多くの不明確な所がある。本伝には不確実なものもあるとする研究者さえいて、もともとそれほど明瞭でない状況をさらに曖昧にしてしまっている。そこで改めて考証と分析を行わなければならない)」[3]としている。周桂钿氏が指摘するその研究者とは、「今对古今学者特别是台湾学者徐复观在《王充论考》中所提的疑问分几个问題加以考辨（ここでは古今の学者特に台湾の学者徐復観氏が『王充論考』の中で提出した疑問をいくつかの問題に分けて考察する)」[4]とあり、台湾の徐復観氏のことである。徐氏は王充が郷里で「孝」として称賛されたこと、「太學」で学び大儒班彪に師事したこと、謝夷吾が推薦したことなどの『後漢書』王充本伝の記載の一部を否定している[5]。そして、徐氏は王充が父祖たちを侮蔑しているとしていること、都に上れなかったこと、政治の中心にいられなかったこと、功名心や権力欲が強かったことなどをその根拠にしている。その徐氏の主張に対して周氏は「经过一番考辨,我们认为, 范晔《后汉书》王充本传和《论衡・自纪篇》所记载的王充生平事迹,是基本一致的,都是可信的。它们由于侧重点不同,可以互为补充（(以上）ひととおりの考察を通して、范曄の『後漢書』と『論衡』「自紀篇」に記載されている王充の生涯の事績は、基本的に一致するものであり、信頼できる。それらは重点が異なっていることによって、互いに補充し合うことができる)」[6]としている。周氏が言うように、徐氏の主張は確かに受け入れがたいものであり、王充に対する何らかの強い先入観があるのではないか、と疑わざるを得ない。

本稿においては、王充の人生とその著書『論衡』について考えるのにあたり、自紀篇及び『後漢書』の王充列伝などを主な資料として、徐氏が王充伝について指摘した問題点とその指摘に対する周氏の反論を手掛かりとして、王充の人生および彼が生きた時代的背景と彼の批判思想が行われるようになった経緯について考察していきたい。

（一）遊侠の徒から儒教の徒へ

自紀篇の末尾、王充は晩年における自らの心境について以下のように語る。

充以元和三年徙家辟詣楊州部丹陽、九江、廬江[7]。後入爲治中，材小任大，職在刺割，筆札之思，歴年寢廢。章和二年，罷州家居。年漸七十，時可懸輿；仕路隔絶，志窮無如。事有否然，身有利害。髪白齒落，日月逾邁[8]；儔倫彌索，鮮所恃賴；貧無供養，志不娛快。暦數冉冉，庚辛域際[9]；雖懼終徂，愚猶沛沛；乃作養性之書凡十六篇。養氣自守，適食節酒[10]，閉明塞聰，愛精自保，適輔服藥引導，庶冀性命可延，斯須不老。既晩無還，垂書示後。惟人性命，長短有期，人亦蟲物，生死一時。年歴但訖[11]，孰使留之？猶入黄泉，消爲土灰。上自黄唐，下臻秦漢而來，折衷以聖道，枳理於通材；如衡之平，如鑑之開，幼老生死古今，罔不詳該。命以不延，吁嘆悲哉！（自紀篇）

充は元和三年を以て家を徙し辟（め）されて楊州部の丹陽、九江、廬江に詣（いた）る。後に入りて治中と爲るも，材小任大にして，職は刺割に在れば，筆札の思，歴年寢廢す。章和二年，州を罷め家居す。年漸く七十，時に輿を懸く可し；仕路隔絶し，志窮して如く無し。事に否然有

り，身に利害有り。髪白く齒落ち，日月逾々（ますます）邁き；儔倫彌々（いよいよ）索き，恃賴する所鮮し；貧にして供養する無く，志娯快ならず。曆數冉冉として，庚辛の域（ある）いは際なり；終徂を懼ると雖ども，愚猶ほ沛沛たり；乃ち養性の書凡そ十六篇を作る。氣を養ひて自ら守り，食を適にし酒を節し，明を閉ぢ聰を塞ぎ，精を愛しみ自らを保んじ，適だ服藥引導を輔とし，性命の延ぶ可く，斯須の老いざるを庶冀ふ。既に晩にして還る無く，書を垂れて後に示す。惟だ人の性命のみは，長短期有り，人も亦蟲物なれば，生死一時あり。年歴但だ訖（おわ）らば，孰か之を留め使めん？猶ほ黄泉に入り，消えて土灰と爲らん。上は黄唐自り，下は秦漢而來に臻（いた）るまで，折衷するに聖道を以てし，理を通材に枳（さ）くこと；衡の平なるが如く，鑑の開くが如く，幼老生死古今，詳該せざるは罔し。命以に延びず，吁嘆悲しい哉！（自紀篇）

と。「元和三年（西暦八十六年）」王充六十歳になると、「丹陽（現在の江蘇省の長江以南あたり）、九江（現在の安徽省中部）、廬江（現在の安徽省合肥市）」の各郡を転勤し、その後、「楊州」の「治中」に昇進し、その職の特殊性や重要性もあって、歴年募っていた「筆札の思」いを閉ざしていた。「章和二年（西暦八十八年）」六十二歳となった王充は、とうとう「州」での役を辞め、「筆札の思」いを叶えることができた。これは、『後漢書』本伝の「刺史董勤辟（め）して從事と爲し，治中に轉じて，自ら免じて家に還」る、というのと重なる。そして、齢七十となると、一切の「仕路」を絶ち切り家に籠る生活を始めた。その後、王充は精神的に鬱屈し体力的にも老いが顕著になった。時の流れに対しては抗しがたくも忍び寄る死の影におびえつつ、人生最後の著書「養性の書凡そ十六篇を作」り、「氣を養」い食事量の制限や節酒、「服藥引導」の助けなど、あらゆる手段を講じて、老いをとどめ少しでも命を長らえようと努力を重ねた。しかし、それでもなお忍び寄る年波には勝てず自らが老いて行く自覚はどうすることもできなかった。命を延ばすことなどできないのは歴史を紐解き見れば当たり前のこと、やむを得ないことなのだ、という悲痛の叫びを残しつつ、とうとう最期の時を迎えるに至ったという。自分はいよいよ「消えて土灰と爲らん」、死は救いようのない絶望だとする王充は、少しでも長らえて文筆を執ろうと執念を燃やし続け、最期の悲痛の叫びの声をあげながら自紀篇を閉じている。このように自紀篇は、王充が『論衡』を執筆し終え一切の活動をし終えた後、自らの人生のほぼ全てを振り返った自叙伝のようなものである。

我々は自紀篇の冒頭に立ち戻ろう。

王充者，會稽上虞人也，字仲任。其先本魏郡元城人[12]。幾世嘗從軍有功[13]，封會稽陽亭。一歳倉卒國絶，因家焉；以農桑爲業。祖世勇任氣[14]，卒咸不揆於人。歳凶，横道傷殺，怨讎衆多；會世擾亂，恐爲怨讎所擒，祖父汎舉家檐載，就安會稽，留錢唐縣，以賈販爲事；生子二人長曰蒙，少曰誦，誦即充父。祖世任氣，至蒙、誦滋甚，故蒙、誦在錢唐，勇勢凌人，卒復與豪家丁伯等結怨[15]，舉家徙處上虞。（自紀篇）

王充は，會稽上虞人なり，字は仲任。其の先は本と魏郡元城の人なり。幾世嘗て軍に從ひ功有り，會稽の陽亭に封ぜらる。一歳倉卒に國絶ゆれば，因りて焉に家し；農桑を以て業と爲す。祖世勇にして氣に任じ，卒く咸（みな）人と揆らず。歳凶に，横道傷殺すれば，怨讎衆多なり；會ま世擾亂し，怨讎の擒する所と爲るを恐れ，祖父の汎は家を舉げて檐載し，會稽に就きて安んじ，錢唐縣に留まり，賈販を以て事と爲す；子二人を生み長を蒙と曰ひ，少を誦と曰ひ，誦は即ち充の父なり。祖世氣に任じ，蒙、誦に至り滋（いよい）よ甚だし，故に蒙、誦は錢唐に在りて，勇勢人を凌ぎ，卒に復た豪家丁伯等と怨を結び，家を舉げ徙りて上虞に處る。（自紀篇）

と、王充は自らの先祖のことから書き起こす。先祖はもともと「魏郡元城」（現在の河北省邯鄲市大名県）の人であったとするが、高祖父「幾世」の軍人としての功績が認められ「會稽の陽亭（現在地不明）に封ぜら」た。また、曽祖父「祖世」が「横道傷殺」し「怨讎衆多」く「怨讎の

擒する所と爲るを恐れ」[16]、祖父の「汎」の時代に「會稽」「錢唐縣（現在の浙江省杭州市）」に転居し、「賈販を以て事と爲」し、叔父王蒙と父王誦の世代には，遊侠の「氣」ますます甚だしく、「勇勢人を凌ぎ」豪族と遺恨を結び、とうとう「上虞（現在の浙江省紹興市上虞区）」に逃れざるを得なかった、と語る。まさしく父祖たちが遊侠の徒であったことを王充は強く意識している。『史記』游侠列傳の序論では、韓非子が「儒は文を以て法を亂し，而して侠は武を以て禁を犯す」と、「儒」と「侠」を並べて謗る言葉を引用している。韓非子の政治思想からすれば、「儒」と「侠」が国政を蝕む「蟲」として批判されるのは当然のことであった。しかし、司馬遷は続けて「いま游侠は，其の行いは正義に軌らざると雖も，然れども其の言は必らず信あり，其の行は必ず果あり，已に諾せば必ず誠あり，其の軀を愛まず，士の阨困に赴むき，既に已に存亡死生し，而も其の能を矜らず，其の德を伐るを羞ず，蓋し亦多とするに足る者有り」と述べ、游侠の行いが「正義に軌らざる」面のあることを認めつつも、「信」や「誠」など人間社会に必要な德行を有するものとして評価していた。また、宮崎氏は、前漢に比べて社会秩序が固定し平和が永続すると、槍先にて功名を立てる機会が少なくなるのに伴って、地方の豪族出の遊侠少年が、次第に節を改めて学に就くことになったとし、当時の社交界において、学を修めて名節を励む学徒の位置が高く、時代遅れの旧型の遊侠は、反ってその後塵を拝する有様であったと論じ、前漢時代に比べて後漢時代の遊侠の社会的地位の低下を明言している。宮崎氏はこれを「遊侠の儒教化」と表現する[17]。王充はまさに父の世代までの遊侠者と決別し、学徒への道を進み始め、「遊侠の儒教化」を実践したのである。

建武三年充生。爲小兒，與儕倫遨戲，不好狎侮；儕倫好掩雀捕蟬，戲錢林熙，充獨不肯。誦奇之。（自紀篇）

建武三年に充生る。小兒爲りしとき，儕倫と遨戲するに，狎侮せらるるを好まず；儕倫は好んで雀を掩ひ蟬を捕え，戲錢林熙するも，充のみ獨り肯てせず。誦之を奇とす。（自紀篇）

父の「誦」は「充」が「小兒」であった頃から、他の子供らとは異なった奇才ぶりを発揮していたのを見抜き、その先行きを慮って遊侠の徒として育てるのではなく、学問を学ばせようとしたのである[18]。

さて、自紀篇冒頭の父祖たちを非難するかのような表現について、従来の研究者の多くは王充の不孝と不遜ぶりを指摘する材料としている。しかし、本稿ではそのような指摘は批判思想家という先入観にあまりにも偏った結果生まれた、王充に対する不当な評価ではないかと考える。王充が儒教の徒になろうとしたことは彼が自ら決めたことではない。父祖たちと同じ遊侠の徒となることなく、学問を志すことによって身を立てようとしたのは、「充」が「小兒」であった（自分の将来を自分では決められない）頃の父王誦の判断によるものだからである。ここでは遊侠の徒の息子が儒学の徒に変更した事実の経緯を述べようとしたのに過ぎず、父祖たちを誹謗中傷しようとしたのではない。この点について、佐藤氏は「父祖以来の血を受けた彼の不揆の稟性は、學問人としても、遠慮なく発揮せられて、後漢國家の精神的支柱としての、當時の傳統儒學に於ける祖述的學風に従うを潔しとせず、むしろ自らを駆って、世俗の學に對する自由批判の方向へと、赴かしめるにいたった」[19]として、王充の「不揆の稟性」と彼の自由批判をなす学風が、「父祖以来」の遊侠者の血統によるものであることを強調している。また、李维武氏も「祖辈的刚烈性格与坎坷经历，无疑对王充的人格与思想的形成产生了深刻的影响。王充的梗直不苟的人生态度和憤世嫉俗的批判精神，就潜隐着祖辈“勇任气”的家风（先祖の気性の激しい性格と失意の経歴は、間違いなく王充の人格と思想の形成に強い影響を与えた。王充の堅忍不抜な人生態度と世俗への憎悪という批判精神は、先祖の「勇任の氣」の家風に隠されている）」[20]としているが、王充は自紀篇でそういうことを言いたかったのではない。王充の批判精神は「不揆の稟性」の血統が受け継いだものではなく、現実の目の前にある批判すべき虚妄な対象を批判したまでに過ぎな

い、と王充は言うのではないか。そもそも、父祖の家風伝統とか血統とか言うのは、あまりに感覚的、感情的、抽象的な事柄に過ぎず、王充の人生を決定づけるような具体的根拠とはならない。
　ともかく王充は父の方針に従い、六歳になると本格的に儒家の徒を志して歩みを進めた。

六歳教書，仁恭愿順，禮敬具備，矜莊寂寥，有巨人之志。父未嘗笞，母未嘗非，閭里未嘗讓。（自紀篇）
六歳書を教へ，仁恭愿順，禮敬具備し，矜莊寂寥にして，巨人の志有り。父未だ嘗て笞たず，母未だ嘗つて非らず，閭里未だ嘗つて讓めず。（自紀篇）

六歳になった王充は父母から文字を学んだが、学びの態度は恭しく慎み深く、優しく素直で、礼儀作法が身に付いていて、厳かで口数少なく、「巨人の志」があり、父母からも村の誰からも咎められることはなかった、という。儒者としての資質が幼少のころから身についていた、というのである。そして八歳になると、いよいよ「書館」に入館して学ぶようになった。

八歳出於書館；書館小僮百人以上，皆以過失祖謫，或以書醜得鞭。充書日進，又無過失。（自紀篇）
八歳書館に出づ；書館の小僮百人以上，皆過失を以て祖謫せられ，或いは書醜を以て鞭を得。充は書日に進み，又過失無し。（自紀篇）

ここでは、「書館」での王充の学びの様子が描かれている。これによると、「書館」に在籍し、ともに手習いを学ぶ「小僮」は「百人以上」もいたという。この「百人以上」の中には儒家の子だけでなく、おそらく、王充と同じく遊侠の徒の子供や「農桑を以て業と爲」したり「賈販を以て事と爲」したりする一般庶民の子供たちも多くいたに違いない。後漢王朝は統治できる有能な人材を広く求めようとする気運にあふれた時代となり、有能な若者たちは出自にとらわれることなく、文や儒を学ぶことによって立身出世が叶う希望の途が開かれ始めた時代であった。しかし、庶民の他の「小僮」のほとんどは「過失」と「醜」によって叱責されていたのに比べ、王充少年の手習いの学習は日々上達したこと、過失が無かったこと、群を抜いて優秀な子供であったこと、などが述べられている。多くの「小僮」の中でのこの際立った優秀さから言えば、儒学の徒として官途に就いて輝かしい未来が保証されるはずであった。少なくとも自紀篇を著している今ここで、王充は当時のことを振り返り、そのように確信していたのに違いない。ここまでの王充自身による度を過ぎた自画自賛ぶりは、そのことに対する伏線であり、結局は叶わなかったことに対する伏線でもある。
　さて、『後漢書』王充列伝に「充少くして孤，鄉里は孝と稱す」とあるのを徐氏は否定する。すなわち、自紀篇で父祖たちに対して王充が否定的な表現をしていて「不孝」であったこと、そもそも王充の思想に「孝」という意識が無いこと、王充は晩年、鄉里の叱責を受けて他鄉に難を避けたことなどを理由に、徐氏は王充が「孝と稱」されたことを否定している[21]。王充は「孝」であってはならないというのが徐氏の主張であるかのようでもある。しかし、父母に対する従順な態度や、行き届いた礼儀作法、誰からも咎められなかったという少年王充が、親を亡くして「孤」となった後、鄉里の人々から推薦され、支援されて学問を続けたというのは決して不自然なことではない。この本伝の記載は、遊侠の出であった少年王充が、父祖伝来の遊侠の道を歩むことを改め、学問へと志を変えるにいたった転換の経緯を語ったのに過ぎない。

手書既成，辭師受論語尚書，日諷千字。（自紀篇）
手書既に成るや，師を辭して論語尚書を受け，日に千字を諷す。（自紀篇）

「書館」で手習いを学んだのがどれぐらいの期間なのか、何歳の頃から『論語』と『尚書』を学びはじめたのかは自紀篇に記されておらず不明[22]だが、王充は手習いを習得するとその師を辞して『論語』と『尚書』を学びはじめ、儒家の徒としての基本を本格的に身につけ歩み始めた。しかも、一日に千字ものの多くを暗唱したというほど驚異的な成果を収め、儒教の基本的知識の習得は幼少の頃にはすでに成し遂げられたことを王充は確認している。

（二）博覧を好みて章句を守らず

『後漢書』王充列伝に「後に京師に到り，業を太學に受け，扶風の班彪に師事す」とあるのが、自紀篇にその記載が無いのを徐氏は訝る。徐氏は、もし本当に「太學」で学んだのであれば、王充のいつもの驕り高ぶった口ぶりから考えると、そのことを記述するのは当然のことではないか、また、もし王充が班彪の門下であったならば、どうして「未だ嘗つて墨涂を履み，儒門を出でざれば」（自紀篇）などと世俗の人々から言われるのか、さらに、『論衡』で班彪のことが語られている記述を見ると、どこかよそよそしく班彪との間に師弟関係があるようには感じられない、としている[23]。徐氏は、王充が中央「京師に到」ったこと、「太學」で学んだこと、まして「通儒上才」[24]の班彪に学んだことなどは到底認めることなどできないことだとする。

王充が班彪に師事したかどうか、今となっては不明なことと言わざるを得ない。確かに徐氏の言うように、この記載が自紀篇に無いのは不可解なことでもある。王充が大儒班彪に学んだことは記載されてもよい。しかし、「書館」に「百人以上」の「小僮」が在籍していたことから考えると、「太學」で学んでいた学生の数はそれをはるかに超えることは容易に推測できる。だとすれば、王充は大儒班彪に学んだ多くの学生の一人に過ぎなかったのかも知れず、班彪と王充とが心の通い合った師弟と呼べるような関係にまでは至らなかったことも容易に推測できる。また、時間的に班彪と王充が「太學」で接触する可能性があり、王充が班彪に儒学を学んだとすることは『後漢書』の編者、范曄にとっては重要な要素だったのかも知れない。しかし、王充から見ればそのことはそれほど重要なことではなかった。むしろ、王充は「太學」で学んだことはあまり意義のあることには思えなかったのではないか。「太學」での学びは、伝統に跪き、権威主義にまみれ、経典を崇め奉り、ただ鸚鵡返しのように繰り返し経典を朗唱するばかりで、王充の知的要求に全く応えてくれないものばかりである。王充が「太學」で学んだことは俗儒たちの刺激の無い活動の繰り返しでしかなかった。その「太學」で学ぶ「諸生」や「儒者」の様子を以下のように王充はつぶさに語って嘆く。

諸生能傳百萬言，不能覽古今，守信師法，雖辭說多，終不爲博。殷周以前，頗載六經，儒生所能說也[25]。秦漢之事，儒生不見，力劣不能覽也。（效力篇）
諸生は能く百萬言を傳ふるも，古今を覽る能はず，師法を守信し，辭說多しと雖も，終に博と爲さず。殷周以前は，頗る六經に載れば，儒生の能く說く所なり。秦漢の事，儒生見ざるは，力劣りて覽る能はざるなり。（效力篇）

以經明帶徒聚衆爲賢乎？則夫經明，儒者是也。儒者、學之所爲也。儒者學，學、儒矣。傳先師之業，習口說以教；無胸中之造，思定然否之論。郵人之過書，門者之傳教也，封完書不遺，教審令不遺誤者[26]，則爲善矣。儒者傳學[27]，不妄一言，先師古語，到今具存，雖帶徒百人以上，位博士文學，郵人、門者之類也。（定賢篇）

經明にして徒を帶び衆を聚むるを以て賢と爲さんか？則ち夫の經明は，儒者是れなり。儒者は、學の爲す所なり。儒者は學び，學べば、儒なり。先師の業を傳へ，口說を習ひて以て教へ；胸中の造，然否を思ひ定むるの論無し。郵人の過書，門者の傳教や，書を封完して遺さず，教審かに

して令誤らざる者は，則ち善と爲す。儒者學を傳へ，一言を妄りにせず，先師の古語，今に到るまで具さに存し，徒帶ぶること百人以上，博士文學に位すと雖も，郵人、門者の類なり。（定賢篇）

「諸生」は「百萬言」を伝えることはできても「古今を覽る」ことはできず「師法を守信」するしかなく、全く非生産的活動しかしない、と王充は批判する。また、「儒者は、學の爲す所」だというが、実際のところは「先師の業を傳へ，口說を習ひて以て教」える者でしかなく、創造とか思索の欠片もないと批判する。それはまるで文書を遺漏なく運ぶことを大切にする「郵人」や上官の命令をできるだけ正しく詳細に伝達することを第一に考える「門者」のたぐいと同じようなものだと言う。多くの弟子を抱え「博士文學」だと崇められても、学問的に何の値打ちもないと厳しく罵る。

しかし、他方では「太學」でのこの経験こそが、王充に博学の重要性を認識させるにいたったことは皮肉なことと言える。そのことを、『後漢書』本伝は続けて「博覽を好みて章句を守らず。家貧しくして書無く，常に洛陽の市肆に游びて，賣る所の書を閲し，一見して輒ち能く誦憶し，遂に博く衆流百家の言に通ず」と伝える。「章句」の学に別れを告げた王充は日ごとに「洛陽の市肆」をぶらつき、売り物の書籍を手あたり次第に読み耽った。彼の生来の有能さも手伝って王充はただちに「衆流百家の言に通」じ、その博覧強記ぶりを発揮したのである。

人不博覽者，不聞古今，不見事類，不知然否，猶目盲、耳聾、鼻癰者也；儒生不博覽[28]，猶爲閉闇，況庸人無篇章之業，不知是非，其爲閉闇，甚矣。（別通篇）
人博覽せざる者は，古今を聞かず，事類を見ず，然否を知らざれば，猶ほ目盲、耳聾、鼻癰せる者のごときなり；儒生も博覽せざれば，猶ほ閉闇爲り，況んや庸人の篇章の業無きをや，是非を知らざれば，其の閉闇爲る，甚だし。（別通篇）

「儒生」の学びを反面教師として、「博覽」することの大切さを王充は思い知った。未だに一篇の文章すら著していない自分は、今「博覽」しなければ全く闇の世界に陥ってしまう、と王充は考えた。「衆流百家の言に通」じることは「太學」で学ぶことよりもはるかに有意義で重要なことであったに違いない。したがって、自紀篇では「太學」で学んだことを割愛し、以下のように述べる[29]。

經明德就，謝師而專門，援筆而衆奇。所讀文書，亦日博多。（自紀篇）
經明らかに德就るや，師を謝して專門にし，筆を援れば衆奇とす。讀む所の文書も，亦日に博多なり。（自紀篇）

ここで述べる「專門」の意味はよく分からないが、経典の師から離れ自分一人で著作し読書するようになったことを言うのだと思われる。王充は経典の意味を理解し徳行を実践できるようになると師のもとを去った、というより王充は「太學」での学びに辟易した、というのが正しい。王充は「太學」での学びに何も得るものがなかった、というのが真相ではなかったか。そこで、自ら学ぶことにした。このことについては、周氏も「他先向老师学习，后来，“好博览而不守章句”，就“谢门而专门”，不肯局限于老师的家法章句，辞别老师，独立研究，走上自学成才的道路。正因为这样，他才能“博通众流百家之言”，自成一家之说，在汉代学派林立的情况下，树起一面五彩夺目的奇特的旗帜，永远飘扬在中国思想史的天空中！（彼は先ず師に学び、後に「博覽を好みて章句を守らず」、「師を謝して專門にし」、師の家法章句に限ることを承知せず、漢代の学派林立の状況の中で、煌びやかな際立った旗印を掲げ、永遠に中国思想史の天空にたなびかせたのである！）」[30]と述べている。そしてその学びとは、読書範囲の博さと量の多さを誇るもので、自紀篇

でもそのことを強調する。また、別通篇でも、

人之遊也，必欲入都；都多奇觀也。入都必欲見市；市多異貨也。百家之言，古今行事，其爲奇異非徒都邑大市也；遊於都邑者心厭，觀於大市者意飽，況遊於道藝之際哉？（別通篇）
人の遊ぶや，必ず都に入らんと欲す；都には奇觀多ければなり。都に入れば必ず市を見んと欲す；市には異貨多ければなり。百家の言，古今の行事，其の奇異爲る徒だに都邑大市のみに非ざるなり；都邑に遊ぶ者は心厭き，大市に觀る者は意飽く，況んや道藝の際に遊ぶをや？（別通篇）

とある。これは、王充の自らの学びの経験に基づいたものである。学ぶのであれば、必ず都に行き、都に行ったら必ず「大市」に行って、「百家の言，古今の行事」の「奇異」「異貨」に触れるべきである。そうすれば心が湧きたつ、と。その出自から、王充には守るべき一家の学というものが無かったことも彼にとっては幸いしたと言うべきかもしれない。「太學」での学びを契機に宗旨替えをして王充が学んだ「百家の言，古今の行事」は、他の儒家の徒たちと全く異なった個性を育み、王充の批判哲学の基礎となったからである。それを王充は次のように表現する。

才高而不尚苟作；口辯而不好談對：非其人終日不言。其論說始若詭於衆；極聽其終，衆乃是之。以筆著文，亦如此焉；操行事上，亦如此焉。（自紀篇）
才高きも苟も作るを尚ばず；口辯なれども談對を好まず：其の人に非ざれば終日言はず。其の論說は始めは衆に詭るが若きも；其の終りを極め聽けば，衆乃ち之を是とす。筆を以て文を著すも，亦此の如し；操行の上に事ふるも，亦此の如し。（自紀篇）

文才はあるが寡作であり、弁が立つが議論することを好まず、ふさわしい対談者でなければ話さない。彼の「文」も「論說」も「操行」も、最初は異様で民衆を騙すかのようなもののように思われたが、仕舞いにはみな納得した、というのは一般の儒者たちとの人生観と学風の違いを述べたものである。『後漢書』本伝で自紀篇のこの記事を参考にし「充は論說を好み，始めは詭異なるが若きも，終りには理實有り」と語るのと重っている。

『後漢書』本伝で「以爲えらく俗儒は文を守り，多く其の真を失ふと，乃ち門を閉ざして思いを潛め，慶弔の禮を絶ち，戶牖牆壁に各々刀筆を置く。論衡八十五篇，二十餘萬言を著し，物類の同異を釋し，時俗の嫌疑を正す」と言うのは、専ら王充の「博多」の結果である。

（三）官途の失意

『論語』と『尚書』を習得し儒学者としての基本を身に付け、最高学府の「太學」で学んだ王充は、官途において前途ある未来が嘱望されてよいはずである。しかし、「口辯なれども談對を好まず：其の人に非ざれば終日言は」ないという、他者を選別し容易には人を寄せ付けない王充の個性が、官途での出世に障害となったかも知れない。また、彼の「文」も「論說」も「操行」も「始めは衆に詭るが若」く見えたからかも知れない。俗儒たちとはっきりと一線を画した王充は世俗との交わりから離れた。しかし、王充のその個性はいつまでも奇異に映ったわけではなく、議論に納得すると終わりには「衆乃ち之を是と」してくれた、と言う。王充は常識がありすぐれた能力を有し、人間関係や社会性についても問題は無かったはずなのに、それほどの出世を果たすことができなかった。この点について、王充自身も以下のようにやや感傷めいた感想を漏らしている。

在縣位至掾功曹，在都尉府位亦掾功曹，在太守，爲列掾五官功曹行事，入州爲從事。不好徼名於

世，不爲利害見將。常言人長，希言人短。專薦未達，解已進者過。及所不善，亦弗譽；有過不解，亦弗復陷。能釋人之大過，亦忘人之細非[31]。好自周，不肯自彰；勉以行操爲基，恥以材能爲名。衆會乎坐，不問不言；賜見君將，不及不對。在鄉里，慕蘧伯玉之節；在朝廷，貪史子魚之行。見汙傷，不肯自明；位不進，亦不懷恨。貧無一畝之貲[32]，意若食萬鍾；賤無斗石之秩，志佚於王公[33]。得官不欣，失位不恨。處逸樂而欲不放，居貧苦而志不倦。淫讀古文，甘聞異言。世書俗說，多所不安，幽處獨居，考論實虛。（自紀篇）
縣に在りては位掾功曹に至り，都尉府に在りても位亦掾功曹，太守に在りては，列して掾五官功曹行事と爲り，州に入りては從事と爲る。名を世に徼むるを好まず，利害の爲に將に見えず。常に人の長を言ひ，人の短を言ふこと希なり。專ら未だ達せざるを薦め，已に進む者の過を解く。善かざる所に及んでは，亦譽めず；過有りて解かざるも，亦復陷れず。能く人の大過を釋き，亦人の細非を忘る。自ら周くするを好むも，肯て自ら彰さず；勉めて行操を以て基と爲し，材能を以て名と爲すを恥づ。衆坐に會しては，問はれずんば言はず；君將に見ゆるを賜はるも，及ばずんば對へず。鄉里に在りては，蘧伯玉の節を慕ひ；朝廷に在りては，史子魚の行を貪る。汙傷せらるるも，肯へて自ら明らかにせず；位進まざるも，亦恨みを懷かず。貧にして一畝の貲無きも，意は萬鍾を食むが若し；賤にして斗石の秩無きも，志は王公より佚しむ。官を得ても欣ばず，位を失つて恨みず。逸樂に處りて欲放ならず，貧苦に居りて志倦まず。古文を淫讀し，異言を甘聞す。世書俗說，安からざる所多ければ，幽處獨居して，實虛を考論す。（自紀篇）

王充は官途生活における自らの様子を振り返って述べている。すなわち、名声を追いかけることはなく、利害にも奔らなかったし、いつも他人の長所を褒め、その短所について言い及ぶことは稀なことだった、と言う。また、まだ職のない人を優先的に推薦し、職にある者の過ちを見逃し、他人の「大過」を許し「細非」を忘れた。さらに、自ら前向きに何でもするが、自慢せず、「材能」をひけらかさず「行操」を基本とした。みんなと居ても問われなければ答えないような謙虚さで、鄉里にいては「蘧伯玉の節を慕ひ」、朝廷にいては「史子魚の行を貪る」[34]ようだと言う。官を得ても喜ぶようなことなく、位が上がらなくても恨んだりしなかったという。王充は官途において、人間関係において、父祖たちとは異なって事を構えるようなことも他者との接触においてもなんら問題は無かった。それどころか、何一つ非の打ちどころのない完全な人間であることを強調する。能力もあり、操行もすばらしく、謙虚でもあった、と王充は鼻白むような自画自賛を臆面もなく繰り返す。このことはいったい何を意味するのであろうか。

（四）為人について

上に見てきたように、王充は官途生活における自らの振る舞いを完全無欠だったとする。さらに続けて、自らの為人について

充爲人清重，遊必擇友，不好苟交；所友位雖微卑，年雖幼稚，行苟離俗，必與之友。好傑友雅徒，不氾結俗材。俗材因其微過，蜚條陷之；然終不自明，亦不非怨其人。（自紀篇）
充は爲人清重，遊ぶに必ず友を擇び，苟も交はるを好まず；友とする所位微卑と雖も，年幼稚と雖も，行苟も俗を離るれば，必ず之と友とす。傑友雅徒を好み，氾くは俗材と結ばず。俗材は其の微過に因り，蜚條之を陷る；然れども終に自ら明らかにせず，亦其の人を非怨せず。（自紀篇）

と語る。王充は自らの為人を、「清重」だと言う。この「清重」とは友人を選ぶこととその選び方について主に述べている。すなわち、「傑友雅徒」と交わり「俗材」から離れることを信条と

している、という。ここで言う「傑友雅徒」がどのような友人のことか詳細な記述が無く具体的には分からないが、彼らの職位が「微卑」でも年齢が「幼稚」でも構わない、操行が世俗と離れていること「俗材」とは異なった人々のことを言う。その「俗材」とは他人のわずかな過ちを内通して陥れるような官僚社会に跳梁跋扈する数多くのあさましい人々のことである。とにかく、王充は多くの「俗材」たちとは一線を画していた。たとえどんなに優れた人間性であるにせよ、むしろ有能であるがゆえに、また王充のその出自のゆえに、これら「俗材」たちから嫌われ、言われなき誹謗中傷を受け続け、繰り返し貶められたからである。しかし王充は「俗材」たちの悪行に対しては、何ら抵抗も反論もしなかったのだと言う。さらに、王充が抵抗も反論もしなかった理由は「進むを好む故に自ら明らかにす，退くを憎む故に自ら陳ぶ；吾好憎無し，故に默して言ふ無し」[35]とあるのを見れば、少なくともこの時点において、王充は官途における出処進退にはすでに何ら興味を示さなくなってきた。「孔子は命と稱し，孟子は天と言へば，吉凶安危，人に在らず。昔人之を見る，故に之を命に歸し，之を時に委ね，浩然として恬忽，怨み尤める所無」く[36]、孔子や孟子がそうしたように人の「吉凶安危」を「天」や「命」に帰し、「時」に委ね、王充は官途での失意、「俗材」たちの嫌がらせに耐え、それらをすべて「天に歸」して達観しようとした。そのため、王充の性格は「充は性恬澹にして，富貴を貪らず，」[37]「德の豐ならざるを憂へ，爵の尊からざるを患へず；名の白（きよ）からざるを恥ぢ，位の遷らざるを惡まず」[38]という境地に至ったと考えられる。

王充は官途において期待するものは何もなくなった。王充の心は「俗材」たちが家柄と伝統に胡坐をかいたままに行う「文を守り，多く其の真を失ふ」（『後漢書』本伝）不毛な学問に対する怒りと軽蔑で溢れていった。王充の思いは次第に内側に向かいながら執筆活動の場へと籠っていくこととなった。

（五）書について

立身出世を貪り零落を軽忽に付す世俗たちの俗性に対して、王充は激しく憤懣し、彼らに警鐘を鳴らすことを目的として、王充は最初の著書『譏俗節義』十二篇を著した。

俗性貪進忽退，收成棄敗。充升擢在位之時，衆人蟻附；廢退窮居，舊故叛去。恚俗人之寡恩[39]，故閑居作譏俗節義十二篇。冀俗人觀書而自覺，故直露其文，集以俗言。（自紀篇）

俗の性は進むを貪り退くを忽にし，成を收め敗を棄つ。充の升擢せられて位に在るの時は，衆人蟻附するも；廢退窮居するときは，舊故も叛き去る。俗人の恩寡きに恚る，故に閑居して譏俗節義十二篇を作る。俗人の書を觀て自ら覺らんことを冀ふ，故に其の文を直露にし，集ふるに俗言を以てす。（自紀篇）

これによると、群蟻附羶を繰り返す「俗人」の「恩寡きに恚」り、彼らに「自覺」を促すことを目的に『譏俗節義』十二篇を著したという。その目的を達成するため、本書の文を意識的に「直露にし」語句は「俗言」を交えた、と王充は語る。すると、すかさず『譏俗節義』の読者の一人は、「譴めて之を淺と謂」[40]い、浅薄だと批判する。それに対して王充は「俗は形露の言を曉るに，勉むるに深鴻の文を以てするは，猶ほ神仙の藥を和して以て甎欬を治め，貂狐の裘を制して以て薪菜を取るがごとし」[41]などと巧みな比喩を用いて、「形露の言」を用いたのは人を見て法を説いた結果なのだと反論する。ここで注意したいのは、『譏俗節義』十二篇は世俗に分かりやすく簡単な表現で書いたという王充の意図に反して、世間から「淺」と非難されたことである。すなわち、伝統的儒家の徒でなく、学問の家柄でもない王充のような輩には、そもそも「深鴻の文」など書けるはずがないのだと世俗ははなから非難を浴びせる。そこには、強い先入観が介在してい

ると言わざるを得ない。また、王充はその世俗を批判し、その世俗によって再び批判されるという批判の応酬をする。王充の処女作『譏俗節義』に対するこうした世間の批判は、次の書『政務』にも代表作『論衡』に対しても通底する。

充既疾俗情，作譏俗之書，又閔人君之政，徒欲治人，不得其宜，不曉其務，愁精苦思，不睹所趨，故作政務之書；又傷偽書俗文，多不實誠，故爲論衡之書。夫賢聖歿而大義分，蹉跎殊趨，各自開門；通人觀覽，不能訂詮[42]。遙聞傳授，筆寫耳取，在百歲之前；歷日彌久，以爲昔古之事，所言近是，信之入骨，不能自解。故作實論。其文盛，其辯爭，浮華虛偽之語，莫不證定[43]。沒華虛之文，存敦厖之朴；撥流失之風，反宓戲之俗。（自紀篇）

充既に俗情を疾み，譏俗の書を作り，又人君の政の，徒だ人を治めんと欲するのみにして，其の宜しきを得ず，其の務を曉らず，精を愁へ思を苦しめ，趨く所を睹ざるを閔ふ，故に政務の書を作る；又偽書俗文の，多くは實誠ならざるを傷む，故に論衡の書爲る。夫れ賢聖歿して大義分れ，蹉跎して趨を殊にし，各自門を開ければ；通人觀覽して，訂詮する能はず。遙かに聞き傳へ授けられしを，筆に寫し耳に取りしは，百歲の前に在りて；日を歷ること久しきに彌れば，以て昔古の事，言ふ所是に近しと爲し，之を信ずるもの骨に入り，自ら解する能はず。故に實の論と作る。其の文盛んに，其の辯爭にして，浮華虛偽の語，證定せざる莫し。華虛の文を沒し，敦厖の朴を存し；流失の風を撥（おさ）め，宓戲の俗に反す。（自紀篇）

とある。これによると、王充は「俗情を疾」んで、「譏俗の書」を著したのに続いて著した「政務の書」は「人君の政」のために宜しき統治方法を書いたものであるとする。また、次の「論衡の書」は、「賢聖」が没して後、記載された「昔古の事」ならば何でも正しいと骨の髄まで信じ込む尚古主義によって侵された「浮華虛偽の語」や「華虛の文」を否定し、これらを「宓戲の俗」に反すことを目的に記されたものであると言う。

自紀篇の後半部分は、王充が著したこれらの書に対する世俗の批判と王充の反論が行われていて、『譏俗節義』十二篇を浅薄だと批判したのに続き、『政務』『論衡』に対しても、批評者として登場する何人かの「或る」人々が以下のようにほぼ異口同音に批判を繰り返す。

① 王充の書が「形露にして觀易」いことについて

「或る」人は「經藝の文，賢聖の言」が「鴻重優雅」なもの「卒には曉睹し難」いものに比べて、『論衡』はあまりに分かりやす過ぎると言う。「譏俗の書」が「俗人を悟らしめんと欲し」て分かり易く表現したのは理解できるとしても、「論衡の書」までも平俗なのは、「豈に材に淺極有りて，深覆を爲す能はざるか？」と述べ、王充の能力を「淺極」だからではないかと激しく非難する[44]。その批判に対する王充の反論は、そもそも「筆もて著す者」は読者が理解しやすいようにしようとすべきものであるが、それはなかなか難しいものだと言う[45]。

② 王充の書が「俗に違詭」していることについて

「或る」人は、王充の書が「今殆どの說は世と同じからず，故に文は俗に刺り，衆に合はず」[46]と、王充の書のほとんどが「俗」「衆」の唱える「說」と異なる、異端的なものであることを非難する。これに対する王充の反論は、「答へて曰く：論は是を貴びて華を務めず，事は然るを尚んで合ふを高しとせず。論說は然否を辯ずれば，安んぞ常心と譎（いつは）り、俗耳に逆はざるを得んや？衆心非として從はず，故に其の偽を喪黜して其の真を存定す；如し當に衆に從ひ人心に順ふべき者ならば，舊に循ひ雅を守り，諷習するのみ，何の辯ずることか之れ有らん？」[47]と。すなわち、「論說」とは偽りを否定し真実を追求するものであるから、一般民衆の常識とは異なることが多く、民衆の考えに従うようなものを書くのであれば、彼らがいつも行っているような「諷習する」だけのことでしかなくなってしまうのだ、と言う。

③ 王充の書が「純美」でないことについて

「或る」人は、「今新書は既に論譬に在りて，俗に說くこと戾を僞し，又美好ならず，觀に於

て快しからず」とか「然らば則ち通人書を造れば，文に瑕穢無し。呂氏淮南の市門に懸けらるるや，之を觀讀する者，一言を訾（そし）る無し。今二書の美無く，文衆盛と雖も，猶譴毀多し」[48]と語り、「或る」人は王充の書を「新書」[49]と、尚古卑近主義にまみれた、蔑視を込めた表現に始まる。だが、この「或る」人が語る「譬え」が多いのが「美好」ではないと言うのはどうしてか、「俗に說くこと戾を僞」すというのが一体どういうことなのかなど、今一つ不明確であって、結局「或る」人の言葉は、批判のための批判に過ぎないのではないか。さらにまた、『呂氏春秋』『淮南子』が一言一句にいたるまで「瑕穢」が無いのに比べ、この「新書」は欠点だらけ誤字脱字だらけだと批判する。その批判に対して王充は「言の金なるは貴家より起り，文の糞なるは賤室より出づ；淮南呂氏の，文に累害無きは，由りて出づる所の者，家富み官貴ければなり。夫れ貴きが故に市に懸くるを得，富むが故に千金の副有り。之を觀讀する者，惶恐畏忌し，乖いて合はざるを見ると雖も，焉んぞ敢て一字を譴めんや？」[50]と反論する。「文の糞なるは」と自嘲を込めて表現する自らの文章や書籍そのものに決して瑕疵があると認めたわけではない。瑕疵があると言われるのはそれが「賤室」から出たからに過ぎない。『淮南子』『呂氏春秋』など「貴家」の手によって書かれたものにはたとえ瑕疵があっても、読む者は筆者の権力を恐れて指摘することができないのだ、と王充は言う。

④ 王充の書が「前人」の著書と比べて似ていないことについて

「或る」人は、王充の書に首尾一貫性がなく、経典や伝書の文とも、司馬遷や揚雄らの著作と対照しても相容れないと批判する[51]。その批判に対して王充は、およそ人の子は誰もが「父母」に似ないで異なっていること、それぞれが天から受けるところのものを好いものとするのだと言う[52]。王充の「氣」の思想とも関り、彼自身が遊侠の徒であった父祖たちと異なっているように、子はそれ自身が享受した自然な個性や長所が大切なのだ、と言おうとするものである。

⑤ 王充の書が必要以上に分量が多いことについて

「或る」人は、およそ文章や言葉というものは簡約なものが分かり易いものであるのに比べ[53]、「今作る所の新書」とここでも『論衡』に対してやや揶揄しながら，「萬言を出だし，繁にして省ならざれば，則ち讀者盡すこと能はず；篇一に非ざれば，則ち傳ふる者領る能はず」（自紀篇）[54]と批判する。それに対する王充の反論は「今失實の事」や「華虛の語」が多いなかで、とても簡潔にすることなどできないと述べ[55]、「吾が書」は「古の太公望」、「近きは董仲舒」の著作とほぼ同じ分量であるにもかかわらず、「泰多」と批判されるのは、「蓋し以て出づる所の者微なれば，之を觀讀者譴呵せざる能はざるが謂なり」[56]と、王充の出自や身分が「微」だから批判されるのだ、司馬遷や董仲舒らに対しては批判の矛先を向けないのだと批判する。

⑥ 王充の書は仕えて不遇であったので（家に籠り）自らの思いを著したにすぎないものであることについて

「或」る人は「戲れて」今「吾子（おまえ）」は思う通りに事が運ばず、仕官しては何度も左遷させられ、才能は仕事において練られず、能力は職において発揮されないから、いたずらに思索に耽って文章を綴ったに過ぎず、「美言」をどんなにたくさん著しても何の役にも立たないと非難する[57]。これはもはやすでに王充の書に対する批判ではなく、仕官において不遇だった王充その人に対する罵倒でしかない。それに対する王充の反論は、倉が傾くほどの高官になったとても、そんなことなど物と同様に「百載の後」には無に帰してしまう。自分が望むものは「千載」までも永遠に伝わり続ける豊かな「德」「知」「筆」「言」であるとする[58]。このことを王充は強調して、書解篇では、「著作者を文儒と爲し，說經者を世儒と爲し，二儒世に在りて，未だ何者を優ると爲すかを知らず」の問いに「或ひと曰く：文儒は世儒に

若かず」と言うのを王充は「周公は禮樂を制し，名垂れて滅びず；孔子は春秋を作り，聞傳はりて絶えず。周公孔子以て論言し難し。漢の世の文章の徒，陸賈、司馬遷、劉子政、楊子雲は，其の材能若（すなは）ち[59]奇にして，其の稱は人に由らず。世に傳はる詩家の魯の申公、書家の千乘の歐陽、公孫，太史公に遭はずんば，世人聞かず。夫れ業を以て自ら顯るるは，人を須つて乃ち顯るるに孰與ぞ？夫れ能く百人を紀すは，廑かに能く其の名を顯すに孰與ぞ？」と答え、「陸賈、司馬遷、劉子政、楊子雲」らの「文儒（著作者）」の方が「世儒（說經者）」より優れていると言う。

⑦ 「細族孤門」の出身である王充が著した書など価値が無いことについて

「或る」人は、「宗祖」にはその歴史が書籍に残されているようなすぐれた根幹も一篇の文章も無いような「細族孤門」の出の王充が、「鴻麗の論」を著し「數千萬言」を吐いても背景を持たない、妖怪変化の類に過ぎないと嘲笑う[60]。家伝のないことを蔑視している王充の反論は、「祖濁るるも裔清ければ，奇人たるを牓（さまた）げず[61]」と述べ、「鯀」とその子の「禹」、「叟頑」とその子の「舜」や「伯牛」とその子の「仲弓」、「顔路」とその子の「回」、「孔墨」の「祖」の愚かさと「丘翟」の「聖賢」ぶりや「楊家」と「子雲」、「桓氏」と「君山」の関係など、愚昧な親と賢い子という歴史上の様々な史実からも明らかなように、自分もまた個人として「更めて元を稟く」天から「元」気を得た一つの存在であり、祖先とは全く無関係なのだと言う[62]。

このように見ていくと、王充は官途の世界でも、執筆の世界でも不当に低く見られていた。それが王充の人生だった。王充が出世できなかったのは、決して無能だったからではない、不遇だったからであると言い偶然の結果だと言う。確かに王充は有能であって出世すべき人材であった。王充の場合、ただ「細族孤門」であるがゆえに出世できなかったのに過ぎない。

王充に言わせれば、その書の中味に問題があって、それを批判され非難されるのであれば、その非難を甘んじて受け入れよう。しかし、批判の本質は書に対して向けられたものではない。書に対する批判のようでありながら、実は著者である王充の出自の卑しさや、地位の低さをからかい蔑視するものに過ぎなかった。「新書」「吾子」「戯」などという表現はそのことを如実に物語る。

「細族孤門」の出であったがゆえに王充は出世の途を諦め、門を閉ざして執筆活動に専念した。しかし、その書も「細族孤門」がゆえにふたたび不当な批判を浴びた。しかし結局は、「細族孤門」がゆえに、『論衡』の執筆に専念することができ自らが望んだように後世にその名を残すことができた、という皮肉な結果となった。

王充は世俗に背を向けたと非難された。確かに、王充には世俗大衆と容易に交わろうとしない孤高を好む性質があったかもしれない。しかし、王充にとって問題なのは、世俗がはじめから王充を異端視し、排除していた点にある。俗儒たちは、王充は自分たちの世界にあるべき人間ではない、と見なし続けていた。そのような環境の中で、彼らが生産し続ける虚妄なることを一人で立ち向かい、真実を求め続けた、それが王充の人生だった。

むすびにかえて

筆者は「問題の所在」において、徐氏が王充列伝の記事には疑わしいことが多いと指摘していることについて触れた。徐氏はさらに王充晩年の「友人の同郡の謝夷吾上書して充の才學を薦め，肅宗は特に詔して公車に徵すも，病みて行かず」という記事についても、王充が高官を望んでいたらしいこと、頌漢論を主張し漢王朝を称賛していたこと、この時期は、王充が著作をしていた期間であったこと、そもそも推薦者の謝夷吾に推薦する資格が無いことなどを根拠に否定している[63]。今ここでその真偽を問うこと自体、王充の人生と人生に繋がる思想的傾向を知る上でそ

れほど意味のあることのように思えない。これら徐氏の意見を改めて考察すると、「孝」者として選ばれたこと「太學」で学んだこと有能でありながら無欲だったことなど、どれも王充が道徳的にも学問的にも特に優れた人物であると評価されることにこだわり、それらに対して逐一反論を加えようとしているように思える。このことは、二十世紀の半ば以来、王充が中国古代の優れた唯物思想家として一躍脚光を浴び過度に高く評価されるようになったことと無関係ではない。本稿では、周氏が「经过一番考辨,我们认为, 范晔《后汉书》王充本传和《论衡・自纪篇》所记载的王充生平事迹,是基本一致的,都是可信的。它们由于侧重点不同,可以互为补充（ひととおりの考察を経て、范曄の『後漢書』王充本伝と『論衡』自紀篇が記載している王充一生の事績はほぼ一致していてともに信じられるものである。それらは重点を傾ける傾け方の違いによって、互いに補充しあうことができる）[64]」としているのに改めて同意したい。

以上、王充の生涯と彼の著した書についてひとまず筆者なりに見てきた。ここまで見てきたことを振り返ってむすびにかえたい。

遊侠の徒の子として生まれた王充は、幼い頃から類まれな学問的資質に恵まれていた。父の王誦はその資質に気づき、息子を学問への道へと進ませた。世の中は安定へと向かい、遊侠の徒は不要なものとなる一方で、王朝の統治を支える新しい人材を求めようという時代的要請の中で、王充の能力はその後も遺憾なく発揮され、「太學」にまで進み将来を嘱望された。

しかし、王充はそこでのただ儒学の経典を読み耽るだけの当時の学問方法には飽き足らなかった。そもそも、王充の出自からも彼には守るべき「家学」と言うものが無かった。王充の関心はできるだけ多くの書籍を読み漁り、古今の知識を身に付けることに移って行った。洛陽の都でのこの経験は彼の知識を豊かにし、視野を広くし、価値観を多様にして、彼の批判精神を形成する基礎となった。

他方で、王充のこの経験と強い個性は、世俗との軋轢を生み続け、官吏の任用においても彼の能力に見合った地位を得ることはできなかった。少なくとも王充自身はそのことに不満であった。自分は皇帝を補佐するような職を与えられて然るべきであり、応えられるはずである。しかし、「細族弧門」の家に生まれたがゆえに、王充が心血を注いで著した書までもが世俗からの批判と嘲笑の的になった。それでもなお、王充は書くことによって千年の後世に永遠の名を残したいと思うようになった。しかし、心血を注いで書いたものも「細族弧門」なるがゆえに多くの批判を浴びた。

だが『論衡』は、彼が願った「千載」の年月をはるかに超えて、今もなお多くの読者たちによって読み語り継がれている。

脚注

1　テキストは主に黄暉撰『論衡校釋』（中華民國七十二年　一九八三年　台湾商務院書館発行）を使用した。それ以外には、劉盼遂の『論衡集解』（一九五九年　中華書局発行）北京大学历史系论衡小组の『论衡注释』（一九七九年　中华书局出版）　などを参考にした。また、以下『論衡』からの引用は全て篇名のみを記載する。

2　『論衡』以外のこれら三冊の著書は、『論衡』一書に吸収されているとする研究もある。

3　「中国思想评传丛书」『王充评传』（周桂钿著　一九九三年南京大学出版社出版）「第一章　生平考辨」八十七頁参照。日本語訳は筆者による。なお、周桂钿氏は『後漢書』の内容は正しい史実であることを論証している。また、内山俊彦氏は「王充の歴史意識について」（一九九六年　『中国思想史研究』京都大学）において、近年の詳細なものとしてこの周桂钿氏の研究を紹介している。

4　周氏の上掲書。八十八頁参照。日本語訳は筆者による。

5　『两汉思想史第二卷』（徐复观著　二〇〇一年　华东师范大学出版社）の「王充论考」「二、

《后汉书・王充列传》中的问题」参照。なお、周氏は台湾学生書局一九七九年版の『两汉思想史』を参照している。
6　周桂钿氏著上掲書。百十二頁参照。日本語訳は筆者による。
7　『論衡校釋』では、「充以元和三年徙家辟」とあるのに「難」を加え「充以元和三年徙家辟難」に改め、王充は晩年になって故郷で事を構えて他所に避難したとしている。しかし本稿では、前後の文脈を考え、「辟」を「辟（め）されて」とし、転居し任用されたと考える。この解釈の違いは争いを繰り返した王充の父祖たちの遊侠的気質が受け継がれて王充が晩年になっても持っていたことの根拠となり、この箇所は、王充の人生を検討する際に大きな誤解を生じるきっかけになり、とても重要である。本稿では、『论衡注释』（北京大学历史系《论衡》注释小组　一九七九年　中华书局）を参考にし、「難」の字を加えない。
8　『論衡校釋』により、「日月踰邁」とあるのを「日月逾邁」に改める。
9　『論衡校釋』により、「域」を「或」と読む。
10　『論衡集解』により、「適食則酒」を「適食節酒」に改める。
11　『論衡校釋』により、「年歴但記」を「年歴但訖」に改める。
12　『論衡校釋』では、先祖が王莽と同じ「魏郡元城」であることから、王莽と同族ではないかと疑う。
13　『論衡校釋』により、「孫一幾世嘗從軍有功」とあったのを「孫一」を削除し「幾世嘗從軍有功」に改める。
14　『論衡下』（山田勝美著　昭和五十九年　新釈漢文大系 94 明治書院発行）では、「世祖勇任氣」を「祖世勇任氣」とし、「祖世」を曽祖父の名とし、上にある「幾世」と対応するとしている。本稿はこれに従う。
15　『論衡校釋』により、「末復與豪家丁伯等結怨」を「卒復與豪家丁伯等結怨」に改める。
16　この部分は原文に乱れが多く、定かではない。ここでは整理することを優先して、一先ずひとまず「幾世」高祖父の名とし「祖世」を曽祖父の名とした。
17　「漢末風俗」（宮崎一定著　『日本学術振興委員会研究報告』特輯第四篇・歴史学一九四二年　同氏著『アジア史研究Ⅱ』一九五九年　東洋史研究会　所収）
18　この時期を『王充年谱』（锺肇鹏著 一九八三年　齐鲁书社出版发行）では、「公元三十二年（建武八年）六歳」としており、『論衡校釋附編二』「王充年譜（黄暉著）」では「光武建武十三年　公元三七　充十一歳」としている。
19　『論衡の研究』（佐藤匡玄著　昭和五六年（1981）　株式會社創文社）十九頁。
20　『王充与中国文化』（李维武著 2000 年「大思想家与中国文化丛书」贵州人民出版社）三頁参照。日本語訳は筆者による。
21　『两汉思想史第二卷』（一）乡里称孝的问题 三四六頁 参照。
22　この期間を、上掲の锺肇鹏氏の『王充年谱』では「公元三十五年（建武十一年）九歳」の一年間のこととしており、『論衡校釋附編二』「王充年譜（黄暉著）」では「光武建武十年　公元三四　充八歳」に「書館」に出たこと、『論語』『尚書』を学んだのが手習いの習得の後に要する時間を考えて「光武建武十一年公元三五　充九歳」としている。また他方で、『論衡校釋附編二』「王充年譜（黄暉著）」では、「光武建武三十年　公元五四　充二十八歳」に本伝にある「京師」洛陽に赴き「太学」に進んで班彪に師事したとする。胡適氏は、それより早く光武建武二十年王充十八歳の時のこととしており、周桂钿氏上掲書一一三頁でも、それを王充十七、八歳の頃としている。
23　『两汉思想史第二卷』「（二）乡里称孝的问题」三百四十七頁参照。
24　『後漢書』班彪列伝による。
25　『論衡校釋』により、「儒生所不能說也」とあるのを「儒生所能說也」に改める。
26　『論衡集解』により、「審令不遺誤者」とあるのを「教審令不誤者」に改める。
27　『論衡校釋』により、「傳者傳學」とあるのを「儒者傳學」に改める。
28　『論衡校釋』により、「儒生不覽」とあるのを「儒生不博覽」に改める。
29　李维武氏上掲書、「第二节 王充与汉代知识分子」「一、王充与汉代仕进制度」十四頁に「当然，王充对太学的学习生活并不是十分满意的。特别是当时太学中重“师法”与“家法”的教条主义学风，引起他的深刻不满（当然、王充は太学の学習生活に十分に満足していない。特に当時太学では「師法」と「家法」を重視する教条主義の学風は、彼に深刻な不満を与えた）」

とある。日本語訳は筆者による。
30　周氏上掲書百三頁参照。日本語訳は筆者による。
31　『論衡校釋』により、「亦悲人之細非」とあるのを「亦忘人之細非」に改める。
32　『論衡校釋』により、「貧無一畝庇身」とあるのを「貧無一畝之貲」に改める。
33　『論衡校釋』により、「貧無一畝之貲，志佚於王公；賤無斗石之秩，意若食萬鍾」とあるのを「貧無一畝之貲，意若食萬鍾；賤無斗石之秩，志佚於王公」に改める。
34　『論語』衛霊公篇の「子曰、直哉史魚、邦有道如矢、邦無道如矢、君子哉蘧伯玉、邦有道則仕、邦無道則可卷而懐之」の、「先生がいわれた、まっすぐだな、史魚は。国家に道のあるときも矢のようだし、国家に道のないときにも矢のようだ。君子だな、蘧伯玉は。国家に道のあるときは仕え［て才能をあらわすが］、国家に道のないときにはくるしんで隠しておける。」（岩波文庫　金谷治著『論語』参照。）
35　「好進故自明，憎退故自陳；吾無好憎，故默無言。」（自紀篇）
36　「孔子稱命，孟子言天，吉凶安危，不在於人。昔人見之，故歸之於命，委之於時，浩然恬忽，無所怨尤。」（自紀篇）
37　「充性恬澹，不貪富貴，」（自紀篇）
38　「憂德之不豐，不患爵之不尊；恥名之不白，不惡位之不遷。」（自紀篇）
39　『論衡校釋』により、「志俗人之寡恩」とあるのを「恚俗人之寡恩」に改める。
40　「或譴謂之淺。」（自紀篇）
41　「俗曉形露之言，勉以深鴻之文，猶和神仙之藥以治甎欬，制貂狐之裘以取薪菜也。」（自紀篇）なお、ここでは『論衡校釋』により、「俗曉露之言」とあるのを「俗曉形露之言」に改める。
42　『論衡校釋』により、「不能釘銓」とあるのを「不能訂詮」に改める。
43　『論衡校釋』により、「莫不澄定」とあるのを「莫不證定」に改める。
44　「充書形露易觀。或曰：『口辯者其言深，筆敏者其文沉。案經藝之文，賢聖之言，鴻重優雅，難卒曉睹；世讀之者，訓古乃下。蓋賢聖之材鴻，故其文語與俗不通。玉隱石間，珠匿魚腹，非玉工珠師，莫能采得。寶物以隱閉不見，實語亦宜深沉難測。譏俗之書，欲悟俗人，故形露其指，為分別之文；論衡之書，何為復然？豈材有淺極，不能為覆？何文之察，與彼經藝殊軌轍也？』」（自紀篇）なお、『論衡校釋』により、「不能為覆？」とあるのを「不能為深覆？」に改める。
45　「夫筆著者，欲其易曉而難為，不貴難知而易造；口論務解分而可聽，不務深迂而難睹。」（自紀篇）
46　「充書違詭於俗。或難曰：『文貴夫順合衆心，不違人意；百人讀之莫譴，千人聞之莫怨。故管子曰：「言室滿室，言堂滿堂。」今殆說不與世同，故文刺於俗，不合於衆。』」（自紀篇）
47　「答曰：論貴是而不務華，事尚然而不高合。論說辯然否，安得不譎常心、逆俗耳？衆心非而不從，故喪黜其偽而存定其真；如當從衆順人心者，循舊守雅，諷習而已，何辯之有？」（自紀篇）
48　「充書不能純美。或曰：『口無擇言，筆無擇文。文必麗以好，言必辯以巧。言瞭於耳，則事味於心；文察於目，則篇留於手。故辯言無不聽，麗文無不寫。今新書既在論譬，說俗僞戾，又不美好，於觀不快。蓋師曠調音，曲無不悲；狄牙和膳，肴無澹味；然則通人造書，文無瑕穢。呂氏淮南懸於市門，觀讀之者，無訾一言。今無二書之美，文雖衆盛，猶多譴毀。』」（自紀篇）なお、『論衡校釋』により、「說俗為戾」とあるのを「說俗僞戾」に改める。
49　傍点は筆者による。なお、本稿における傍点はすべて筆者による。
50　「言金由貴家起，文糞自賤室出；淮南呂氏，之無累害，所由出者，家富官貴也。夫貴故得懸於市，富故有千金副。觀讀之者，惶恐畏忌，雖見乖不合，焉敢譴一字？」（自紀篇）なお、『論衡校釋』により、「之無累害」とあるのを「文無累害」に改める。
51　「或曰：『飾文調辭，或徑或迂，或屈或舒，謂之論道，實事委璅，文給甘酸，諧於經不驗，集於傳不合，稽之子長不當，内之子雲不入。文不與前相似，安得名佳好、稱工巧？』」（自紀篇）なお、『論衡校釋』により、「謂之飾文偶辭」とあるのを「飾文調辭」に改める。
52　「百夫之子，不同父母，殊類而生，不必相似；各以所稟，自為佳好。」（自紀篇）
53　この内容は①で述べた「或る」人の意見と矛盾している。このことから、「或る」人が複数存在したこと、これらの批判が批判のための批判であることが窺える。

54　「或曰：『文貴約而指通，言尚省而趣明。辯士之言要而達，文人之辭寡而章。今所作新書，出萬言，繁而不省，則讀者不能盡；篇非一，則傳者不能領。…』」（自紀篇）なお、『論衡校釋』により、「言尚省而趍明」とあるのを「言尚省而趣明」に改め、「繁不省」とあるのを「繁而不省」に改める。
55　「今失實之事多，華虛之語衆，指實定宜，辯爭之言，安得約徑？」（自紀篇）
56　「按古太公望，近董仲舒，傳作書篇百有餘，吾書亦纔出百，而云泰多，蓋謂所以出者微，觀讀之者不能不譴呵也。」（自紀篇）
57　「或虧曰：『所貴鴻材者，仕宦耦合，身容說納，事得功立，故為高也。今吾子涉世落魄，仕數黜斥，材未練於事，力未盡於職，故徒幽思屬文，著記美言，何補於身？衆多欲以何趍乎？』」（自紀篇）なお、『論衡校釋』により、「或虧曰」とあるのを「或戲曰」に改める。
58　「偶合容說，身尊體佚，百載之後，與物俱歿；名不流於一嗣，文不遺於一札，官雖傾倉，文德不豐，非吾所臧。德汪濊而淵懿，知滂沛而盈溢，筆瀧漉而雨集，言潏瀫而泉出，富材羡知，貴行尊志，體列於一世，名傳於千載，乃吾所謂異也。」（自紀篇）なお、『論衡校釋』により、「言溶瀫而泉出」とあるのを「言潏瀫而泉出」に改める。
59　『論衡校釋』では、「若」の字は誤りではないかとする。
60　「充細族孤門。或啁之曰：『宗祖無淑懿之基，文墨無篇籍之遺，雖著鴻麗之論，無所稟階，終不為高。夫氣無漸而卒至曰變，物無類而妄生曰異，不常有而忽見曰妖，詭於眾而突出曰怪。吾子何祖？其先不載；況未嘗履墨涂，出儒門；吐論數千萬言，宜為妖變，安得寶斯文而多賢？』」（自紀篇）
61　『論衡校釋』により、「牓」を「防」と読む。
62　「五帝不一世而起，伊、望不同家而出；千里殊跡，百載異發。士貴雅材而慎興，不因高據以顯達。母驪犢騂，無害犧牲；祖濁裔清，不牓奇人。鯀惡禹聖；叟頑舜神；伯牛寢疾，仲弓潔全；顏路庸固，回傑超倫；孔墨祖愚，丘翟聖賢。楊家不通，卓有子雲；桓氏稽可，遹出君山。更稟於元，故能著文。」（自紀篇）
63　徐复观氏上掲書三百四十八頁～三百五十一頁「（三）谢夷吾推荐的问题」参照。
64　周桂钿氏上掲書、百十二頁参照。日本語訳は筆者による。